

注意..本編のネタバレを含みます。

微睡みの温度

「先輩とはどういう関係なんですか？」と、問い詰められた。

部活のボランティア活動で河川敷のゴミ拾いをしていたとき、ほかの子たちの目から離れた場所に連れてかれて、私は一年生の後輩であるろちゃんにそう訊かれた。

「……ただの友達だよ？」

事実だった。

彼女が先輩——つまりホームズくんのことを特別に想っていることは知っていたし、だからこそ私の初めての耳かき当番の相手が彼だったということとは伏せていた。でもそこは流石ろちゃんと言うべきか、どこかでそのことを耳にしてきたようだった。

ただ、事実として私と彼はただの友達で、だから耳かきの相手に彼を選んだことについても何も後ろめたいことは無かった。

なのに、

「じゃあ先輩のこと、どう思ってるんですか？」

そう訊かれて、私は、

「……ただの友達だよ？」

それが事実かどうか、分からなかった。

お友達とデパートでお買い物をしていたときのこと。

大きく掲げられた「チョコレートフェア」の文字が目に残った。

そこでは世界各国のチョコレートが色とりどりのパッケージに包まれかわいく陳列されていて、

「時間もあるしちよつと見ていこうよ」

なんて誰かの声に押される形で私は売り場へと入っていった。

かわいいのはチョコレートだけじゃない。装飾はキラキラしていて、チョコレートには商品ごとに手書きのポップまで添えられていて、ただ見ているだけで楽しくなった。

「あつ、それ今とても人気なんですよ」

特に気になったものを手に取って見ていると、すぐ後ろから店員さんが話しかけてきた。

「そうなんですか？」

「そうなんですよ！ それ、本場ベルギーでも大人気のチョコで、何でも向こうでは『これを分け合って食べたカップルは生涯幸せに添い遂げられる』っておまじないがあるみたいで。日本でも『気持ちいが伝わるチョコ』って人気なんですよ」

「気持ちが変わるチョコ……」

つい先ほどまで見ていたポップへと視線を戻す。

そこには「気になるあの人へ渡すチョコ」の一文が。

「気になるあの人……」

——彼はただの友達。そう思っていた。

でも彼から貸した本と共にその感想を聞いたあの日、今度はろこちゃんに彼が耳かき当番の相手をしていたのだと河川敷で聞かされて、ちくりと胸が痛んだ。

彼のことは友達として大好きだし、ろこちゃんのことの後輩として大好きだから、そんな二人の仲が進展することは私にとっても喜ばしいこと。そのはずなのに。

気持ちが変わるチョコ。

彼は私のこと、どう思っているんだろう。

そして私は彼のことを、どう思っているんだろう。

自分でも分からない気持ちが伝わっちゃったら、どうなってしまうのだろう。

「……これ、買います！」

渡す口実も思いつかないまま、私の足はレジへと向かっていた。

どうしてこうなったのだろう。

私は彼と二人きり、授業中の美術準備室で肩を寄せ合いながら、あのチョコレートを二人で分け合っていた。

……あれ、二人で分け合うと……どうなるんだっけ……？

寝不足の頭で買った日のことを思い出しながら、口の中でチョコレートを転がす。

溶けて甘く広がっていくのがまるでふわふわした私の心の中のようで、心地いい。

お酒は入っていないはずなのに、何故だかぼかぼかと温かい気持ちになって、気が付いたら私は彼に身体を預ける形でそのまま眠りに落ちていた。

彼が私のことをどう思っているのかも、私が彼のことをどう思っているのかも、この気持ちの名前が何なのかも、それがチョコレートを通して彼に伝わってしまったのかも、すべては謎のまま何ひとつだつて解けていない。

眠る直前に何かを言ってしまったような気もするけれど、それも憶えていなかった。

ただ、目が覚めたときにも変わらず彼の優しい表情と体温がそこにあって、それがとても嬉しくて安心して。

この瞬間がこれから先もずっと続けばいいのになって、このとき私は少しだけ思った。